

平成30年度 北海道胆振東部地震災害 緊急調査支援補助事業 調査結果報告

調査課題名：北海道胆振東部地震による
児童生徒への継時的心身影響調査

研究代表者 所 属： ひと文化系領域
職 位： 教授
氏 名： 前田 潤

1. 調査の概要

- ・2018年北海道胆振東部地震の地震災害が児童生徒の心身に及ぼす影響を、継時的に調査し、その推移を見る。
- ・これまでに、地震などの災害によって、過覚醒、麻痺・回避、侵入・再体験、解離などのトラウマ症状が現れ、加えて抑うつや自分が悪かったなどの辛い考えが沸き起こることが知られている。そして直後にはそれは正常反応で、時間的推移と周囲が復興するに従って、多くは自然的に回復してくると言われている。
- ・今回の調査では、胆振地域の高校、小中学校を対象として、一週間後、一ヶ月後、3ヶ月後と継時的に調査を実施し、心身の状態についての個別変化、学年、全学でストレス反応がどのように推移していくか、そしてハイリスク者の推移を見ていこうと考えた。

2. 調査の実施方法、経過等

- ・北海道臨床心理士会がスクールカウンセリング活動の中で発災後の児童生徒の適切な心理的支援には、児童生徒の心身のストレス状況を把握しなければいけないことを学校関係者、教育局に説明し、了解のもとストレスチェックを実施。
- ・ただ当初、①推奨すべき統一したストレス尺度がない、②学校の再開が決まっていない中、A高校だけが9月12日再開することが決まっている、という状況があった。
- ・そこで、とりあえず妥当と思われるストレス尺度で再登校するA高校の生徒全員に調査を実施、担任による全員面接、気になる生徒をスクールカウンセラーが支援。
- ・北海道臨床心理士会の教育担当理事により被災地の小中高で実施する同一のストレスチェックリストが提案される。
- ・その後、B高校で、9/19、10/23、3/12、同一ストレス尺度を実施した。
C中学校ではそれと同じストレス尺度を、10/5、11/7に実施した。
- ・本研究では、北海道臨床臨死会の協力の下、これらのデータを収集、分析を実施。

3. 調査結果の概要

- ・高校と中学の比較

高校生の方が、全体的なストレス感が高い傾向にある。

高校生では、苫小牧から通学している学生が6割以上いるにもかかわらず、生徒たちに高いストレス反応が認められている。

- ・ストレスの表れ

ストレスは、睡眠障害、イライラ感、体調不良感として特に現れる。

- ・ストレスの経過

1年生と2年生で一ヶ月後に「イライラ感」が増大傾向にある。

「寝つき」「中途覚醒」など睡眠は全体に改善傾向にある。

- ・大きな余震(2019年2月21日)後

本震よりも余震後にストレス尺度得点が高くなっている